

全体的な印象としては、今回は論説文に力作が多かったこと、また創作文の候補作品についてもみなある程度の水準の作品だったと思います。ただ、それぞれに一長一短で、最優秀賞を選ぶには至りませんでした。

創作文の優秀賞の「自分列車」は、高校二年の夏という微妙な時期を背景に、主人公が体験した“心の旅”が、きちんとした構成と文体で描かれていました。ただ、作品の仕掛けが早いうちにわかってしまい、そのままラストに向かうので、途中もうひとつひねりというか、意外性がほしいと思いました。

奨励賞の「ノアの方舟」は、ややライトノベル風な持ち味のファンタジーで、“こちら側”の世界に預けられた主人公が、約束の期限を迎え、やってきた使者と共に“あちら側”の世界に戻っていくというパターンの物語です。なぜ主人公がこちらの世界に来なければならなかったのか、そしてなぜ今戻らなければならないのかといった基本的な状況設定がきちんとされており、こういう作品にありがちな強引さを感じることなく、読めました。また、そうした運命に遭う主人公の心情も、まずまず破綻なく描かれていました。ただ、こういう作品世界は基本的にかなり長編で書かれるべきストーリーであり、今回の作品はその始まりの部分という感じでもありました。

「昇進会社」は、星新一的世界というか、ショートショート的な味わいの短編でした。うだつのあがらないサラリーマンが、バーで見知らぬ男から「昇進」を持ちかけられ、思わず乗ってしまうという展開はややありがちですが、実はその男も「会社」の一員であり、サラリーマンも結局その会社に引きずり込まれてしまうというひねりの効いたラストには、作者のセンスを感じました。

もうひとつの奨励賞作品「雨溜りの世界」は、作品の展開や書き方にいさかひとりよがりな感じはあるのですが、心の中にあるものを表現したいという“核”のようなものは、とても感じることができました。

そして、論説文の特別賞となった「芥川龍之介『羅生門』の老婆から」は、文芸評論としてとても優れたものだと思います。人間の心の中の「善と悪の葛藤」という文脈の中で語られがちなこの作品、ことに老婆のありようを通して、理想化した「未来」を設定することでともすれば真の「今」と向き合っていない自分自身を問い直すという視点は、論理としても説得力があり、また自身の今の課題を作品と重ねていく切実さをも感じさせてくれました。

それぞれの書き手が、さらに書き続けていくことを期待しています。